

『ショコラ』

2000年/アメリカ/ラッセ・ハルstrom監督作品

ショコラの魔法で名優発見!

会員 岩田 真由美 (55期)

ジョニー・デップという俳優は独特すぎて苦手だ。そんな私がジョニー・デップは文句なしに魅力的な俳優だと感じ、鑑賞後には彼（というか、その役柄）に恋をしていた映画がある。その映画は「ショコラ」。この映画の彼は必ずしも主役ではない。

ヒロインは、フランスの小さな村にふらりと現れた美しい女性ヴィアンヌ。彼女はチョコレートづくりの得意な女性で、辿り着いた村でチョコレート店を開く。しかし、この村の長は敬虔なキリスト教徒で頑固な伯爵、彼に従う村人達も古い考えにとらわれていた。そんな旧態依然とした村が、娘を連れて自由な旅を続ける女性をすんなりと受け入れるわけがない。伯爵は彼女の作るチョコレートを悪魔の食べ物と忌み嫌い、村人はチョコレートも満足に食べられない。映画は、そんな村でヴィアンヌが村人達と交流を深める姿を描いているが、同時に彼女はジョニー・デップ演じる流れ者のルーと心を通わせていく。彼もこの古い村で異端であることはヴィアンヌと同じ立場だ。

この映画はロマンティック・コメディにも分類されるようだが、ヴィアンヌとルーの恋を描いているだけではない。ルーはヴィアンヌの数少ない味方になるが、村人とは異質な存在である彼が彼女に理解を示すことは、彼女の心の支えになると同時に偏見に満ちた人々に異を唱える役割をも担う。映画や小説ではルーのような異端児はあるべき正論を象徴する役割を演じることも多く、社会に蔓延る悪弊に対峙する役割を社会に迎合しない存在に託すことは紋切り型だがシンプルでわかりやすい。本作のジョニー・デップは、その役割を異端でありながら悪役にならず、

実に自然に優しく演じ、それこそが彼が名優である所以だと咄嗟に理解できた。

もう一人、この映画で忘れてはならないのは伯爵の信仰の拠り所でもある神父だ。まだ若い神父は、人々に信仰を説きながらも伯爵の他者を排斥する考え方に戸惑いも感じる存在として描かれるが、その姿は様々な価値観の中で思い悩む人間の姿を具現しているとも思え、ルーよりも愛おしい存在に映る。正しい考え方を代弁しているはずの自分が自分の考え方に迷いを感じる。これは私たちが日々出会う迷いにも通じるのではないだろうか。そういった意味で神父はより私に近い存在でもある。この神父はラストシーンで映画のテーマにつながる大きな役割を演じている。映画は、キリスト信仰社会の中の価値観の対立を描いており、ストーリーは幼い頃に読んだ昔話のようなシンプルな展開であるにもかかわらず、どの社会でも価値観の異なる者を受け入れる姿勢こそよりよい人間関係・社会につながるという基本的なことをあらためて教えてくれる。

劇中では、人々の心を溶かす象徴とも言えるところけるショコラの映像が美しく、日本の和菓子文化とは違うヨーロッパのお菓子文化も感じられるおしゃれな映画でもある。本号が出る時節柄、「三十四丁目の奇跡」のほうが適切だったかも、と未だに迷っているが、「ショコラ」は迷いながらも他者を受け入れるという多様な現代社会でもっとも大切なことを美しい風景とともに教えてくれる良作であり、私もショコラの魔法にかかっているのではないかと未だに信じられないのだが、ジョニー・デップが名優であることも教えてくれる秀作である。